

6月21日 年間第 12 主日

## 湖での奇跡

マルコによる福音書 4 章 35～41 節

<sup>35</sup> その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。<sup>36</sup> そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。<sup>37</sup> 激しい突風が起これ、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。<sup>38</sup> しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。<sup>39</sup> イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。<sup>40</sup> イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」<sup>41</sup> 弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

他の朗読：ヨブ 38:1, 8～11 詩編 107:23～26, 28～31 Ⅱコリント 5:14～17

### Lectio …読む

マルコはこの出来事を通して、イエスの人格や本性を生き生きと照らし出しています。イエスはたったふたつの言葉で、通常神しか従わせることの出来ない自然を従わせるのです。

この同じ状況は、弟子たちにとっては試練です。イエスと弟子たちは、船でガリラヤ湖を渡ろうとしていました。突然嵐が起きて船が波に襲われ、沈みそうになります。ところが私たちは、イエスが艫の方でぐっすり眠っているのを見るのです。弟子たちはしつこくイエスを起こし、自分たちが死にかけているのにイエスが気に留めないことを責めました。

イエスは落ち着いていて、まったく平静を保っています。彼は風と波に、「静まれ」と命じます。嵐はなくなります。イエスは弟子たちの信仰の足りないことと、恐れたことについて彼らを叱ります。彼らはイエスの試験に落第したのです。

弟子たちは、体験したこととイエスの介入の仕方に激しく動揺します。彼らはいま恐れを抱いており、「風や波さえも従う」イエスが何者なのか、と自問するのです。

### Meditatio …黙想する

弟子たちの言葉と行動から、彼らがイエスをどう思っていたのかについて、何がわかりますか。

この聖書の箇所はイエスの本性について何を示しているのでしょうか。ここから何を学ぶことができますか。

この危機的な状況に対するイエスの態度と、弟子たちの態度を比較してみてください。イエスは、私たちが恐れに支配されながら生きるのではなく、平和とご自身に対する信仰によって生きて欲しいと願っているのです。私たちは恐ろしい状況に遭うときに、何ができるのでしょうか。私たちはしばしば最後にイエスを頼ろうとしますが、むしろイエスは私たちが最初に思い出す方であるべきなのです。

### Oratio …祈る

詩編 107 編 23～31 節は、イエスの時代のはるか以前の、小船での旅について語ります。船乗りは神に完全に頼っています。描かれる多くの出来事は、私たちの人生に起こる嵐と凪によく似ています。この詩編を祈りながら、あなたが人生の中で神の助けによって乗り切ったいくつかの「嵐」を思い出

させてくださるようにはんに祈ってましよう。あなたのノートにそれを書き留めてみてください。次に嵐がやってくるとき、それを乗り切るようにはんに助けてくださることを思い出すために、この詩編とあなたが書き留めたノートを開いてみてください。

## Contemplatio …観想する

神はいつも私たちと共にいてくださり、私たちのおかれた状況を完全に支配することが出来ます。哀れなヨブは、神にしつこく不平を述べました。彼が耐え忍んだ数々の苦しみを考えれば、もっともなことです。しかし、ヨブ記 38 章 8～11 節の中で、神はヨブを叱り、天地創造のときにお前はそばにいたのか、とヨブに問いかけます。もちろん、そのときヨブがいた訳はありません。神の言葉は神の全能の力を思い出させているのです。

II コリント 5 章 14～17 節の中でパウロは、イエスを信じたときから、私たちはまったく新しい霊的な生活を始めたのだ、と私たちに思い起こさせます。イエスに対する愛が私たちの原動力になるべきです。もはや自分自身を喜ばせるために生きることなく、風や波のようにイエスに従う者にならなければなりません。